

有機農業に転換した 農民	10人
今年度計画の達成度	90%
目標達成度	80%

マレーシアのセラングールにおける、 農薬依存型から生態保全型農業に 転換するための研修と活動

活動地域  マレーシア

ひろげる助成

2年目

知識の提供・普及啓発



研修会で話をするザカリア氏と受講者たち

苦労した点と工夫した点

■ 苦労した点

農民が農薬の問題点を理解して、国立農業センターという国の機関が稚苗と共に農薬を配布している状況があったため、この点をどのように打破するかが大きな課題であった。

■ 工夫した点

農民だけでなく、マレーシアの国立農業センターの所長をプロジェクトに招くことにより、所長と農薬の問題点を共有し、有機農業の重要性に着目するように工夫をした。

課題

マレーシアの国立農業センターが稲の稚苗とともに農薬を農民に配布してきたこともあって、農民が農薬の多使用により、環境汚染が広がり、多くの農民が健康を害している。

目標

農薬による被害の状況を、農民自身と農業関係の行政の指導者に知ってもらうことにより、そこから脱却して生態保全型農業に転換するための研修を行い、実践を広げる。

活動内容と成果

マレーシアの有機農業の実践家であるザカリア氏が運営している有機農場に農民や地域のリーダーたちを集めて研修を行い、42人の農民の中から10人が有機農法の実践に取り組んだ。さらに、マレーシアの国立農業センター(MARDI)の所長をこのプロジェクトに招いたことにより、従来、稚苗と共に農薬を農民に配布してきた、この国立の農場が生態保全型農業の実験農場を開設するようになり、農薬依存型農業一辺倒から、農薬に依存しない農業に向けての動きが始まった。これは、今回のプロジェクトの大きな成果といっただろう。



MARDI所長の案内で有機実験圃場見学



地域の中学校での有機実験プロット

全助成期間の活動を振り返って

1年目の活動では、農民を対象に研修を行ってきたが、マレーシアの国立の農業推進機関であるMARDIが、稚苗とともに農薬を農民に配布している現実に出会った。そこで、今回のプロジェクトでは、MARDIの所長を招き、一緒に議論を重ねることにより、所長自身が、有機農業の必要性に理解を示すようになり、今年、所長の招きでMARDIを訪問したところ、圃場の中にかなりの広さの「有機実験圃場」が設定されていた。

54 Lorong Batu Uban Satu, Taman Century, 11700,
Penang, Malaysia
-6569667
HP : www.panap.net



今後の 展望

上述したように、国立の農業センターに「有機農業の実験圃場」が設定され、学生・生徒たちが先生に連れられて見学に訪れるようになってきたが、首都圏(Kuala Lumpur)近郊の小・中学校で、校内に「有機農業の実験圃場」を設けるところが出始めており、そうした学校の校長さんが私たちを案内してくださった。そのような教育現場での有機農業の実践活動が今後広がっていくことが期待される。